柿生文化

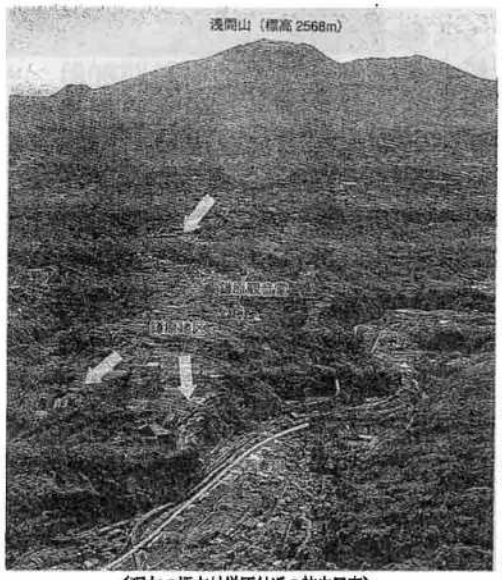
平成２３年３月１８日
川崎市立柿生中学校内
柿生郷土史料館 情報・研究誌
第３３号

―― 新燃岳の大噴火は人ごとではない ――

天明３年（１７８３年） 浅間山麓 鎌原村の悲劇

群馬県吾妻郡嬬恋村大字鎌原にある「鎌原観音堂」にはある伝説がありました。

その伝説とは、小さな丘の上にある観音堂へは１５段の階段を登ってたどりつきます。実は、『この階段の下には更に階段が続いている』という話が昔からこの村に伝えられていました。



（現在の嬬恋村鎌原付近の航空写真）

昭和５４年その伝説が事実であるか、実際に掘ってみることになりました。掘ってみると下の方へさらに階段が続いているではありませんか。

ずうっと掘り進んで約５０段近くになったあたりで白っぽいものが見えてきました。丁寧に土をとりのぞいてみると何とそれは、人骨ではないですか。それも２体、ちょうどこれから階段を登ろうとするようで重なるようになった状態で発見されました。

この２つの遺体をよく調べてみますと下の方の遺体は、石段最下部の１段目に足を掛け今まさに登ろうとしており、女性で年の頃は３０～５０歳程で若い人の髪型であった。

上の遺骨は足が伸び切って自分で登ろうとした感じではなく、下のひとに負ぶさっていたようで年の頃４５～６５歳で髪型は老人の髪型でした。

総合的に考えますと、どうやら火山の噴火で山から流れだしてきた「火砕流」（高温の火山灰や岩が一団となって流れ出るもの）や「泥流」が流れだし押し寄せてくるという情報を受け、娘か嫁でしょうか、母親を背負って小高い丘の頂上付近にある「観音堂」をめざしてひたすら走ってきたのでしょう。そして、階段下まで辿り着いき、あと一息で観音堂というところで「火砕流」に飲み込まれたのではないかと推測されます。

時は、天明３年(1783年) ８月５日昼前、数日前から小規模な爆発を繰り返していた群馬県の浅間山がこの日、大噴火を起こしたのです。

噴火をした泥流は、浅間山麓の鎌原村を襲い、さらには、吾妻川に沿って流れだし、周辺の村々を次々に襲っていきました。

今、九州の新燃岳の情報は、リアルタイムで私たちのもとに流されます。遠い遠い九州のことと安心してしまうことは禁物です。

次頁へ→

（鎌原観音堂二手前の階段の下にさらに35段が発見された）

続く→　８月５日の大噴火の前、５月から地震や小爆発地鳴り等不気味な大噴火の前兆があったようです。

更にこの噴火の影響は、浅間山周辺のみならず、江戸近郊においても火山灰が降り注ぎ、吾妻川に流れこんだ火砕流（高温の火山灰や岩が一団となって流れるもの）や岩屑（がんせつ＝岩や細かい岩石が入り乱れたもの）なだれは利根川に合流し、そこから江戸川に続き江戸湾（東京湾）にまで達しました。きっと沿岸の漁業にも大きな影響を与えたものと考えられます。

この大噴火による被害は、古文書によりますと鎌原村では死者４７７人（生存者93名＝観音堂に逃れた者）、家屋の倒壊と流失９３軒（鎌原村のすべて）。他の村も含めると群馬県だけで約１４９０名の死者が出ました。　鎌原村では、家族を失った者同士が再婚し新たに家を再建し村を復興させたそうです。

（発見された残りの階段と2体の白骨）

昭和５４年以降の調査では、火砕流や岩屑によって埋まった家が次々と発掘されてきました。その報告によると、まさに江戸時代後期の人々の生活の様子がそのままの状態で分かるような遺跡が多く発見され、「日本のポンペイ」（ポンペイ＝古代ローマの時代、ベスビオス火山によって埋もれた都市の名前。発掘調査の結果、当時の生活の様子がそのままの状態で発見されている）とも言われているそうです。

（参考資料：『浅間山大噴火の爪痕』「嬬恋郷土史料館資料」）

東北・関東大地震の教訓

３月１１日午後２時４６分ころ東北地方を中心として発生した「東北・関東大地震」は川崎市においても震度５強という大きな揺れをもたらしました。市内の多くの地域が停電し、主要交通機関もストップするということは、初めての経験でした。

自宅の横浜市鶴見区に徒歩で辿り着く間、多くの教訓をえることができました。

まず、市内の多くが停電しており、夜になると真っ暗だということです。自動車のライトのないところは、数メートル先も見えず、何ともいえない恐怖感に駆られるばかりでなく普段よく利用している道路でさえも判別できずに迷ってしまいやすいという問題がでてきます。携帯電話は、日常便利なものとして利用していますが、いざ地震発生となると全く通話できず無用の長物と化していまうのです。

日常、電気が当たり前の生活をしていると停電となると困ることが多いものです。オール電化を自慢していた方が料理もできず、風呂も入れず、寒さを凌ぐため自家用車に家族全員で乗り込み、暖を取っていた姿が印象的でした。コンビニエンスストアー等の商店は停電のため仕事にならず早めに切り上げている店も多いようでした。交差点の信号機も大方は作動せず、危険な状況もかなりありました。そんな時、地域の消防団の方々がてきぱきと交通整理をされていた姿は大変心強く感じました。

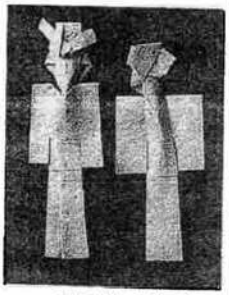
恥ずかしい話ですが普段歩くことの少ない私にとって、突然の２０キロの徒歩というのはかなりの苦労でした。「足が棒になる」とはまさにこのことだなと改めて確認させられました。日常、歩くことに慣れていないということは、いざという時に、こんな苦労をしてしまうものなのですね。

「天災は忘れた頃にやってくる」日常の心構えも大事ですね。

トイレの神様ってどんな神様？

昔、水洗ではない落下式のトイレを使用していた頃、よく「便所の神様」という名を聞いたことがあります。

最近「トイレの神様」という歌が有名になると俄然、〝そんな神様っているの〟や〝どんな神様〟という疑問をもたれる方も多いのではないかと思います。今回は、この「トイレ(便所)の神様」を少し考えてみたいと思います。



（「便所神」福島県）

戦前までは、年の暮れになると小さな丸餅を二つ重ねてお灯明をあげていたり、日常的には、お札を貼っていた家も多かったようです。

戦後でも田舎では、そんな便所を見たことがあります。薄暗い便所から見るお札が妙に神秘的なものに見えることがありました。

便所についてのタブー（禁忌にしてはいけないこと）は全国各地にあります。例えば、〝唾(ツバ)を便器に吐かない〟や〝裸で用をたさない〟など便所の神が怒るからとのことで絶対してはいけないことになっていました。あるいは〝歌を唄うと蛇がでる〟なんていうものもあります。

便所の神様は「雪隠神(せっちんがみ)」「閑所神(かんじょがみ)」「厠神(かわやがみ)」等といわれています。そもそも、この神様の出所はどこからきたのでしょうか。

それは『古事記』に登場する神様からきたものと思われます。「トイレの神様」の歌は、この神様は〝とても美しい女神さま〟という設定になっています。少し、原典の『古事記』を見てみましょう。

（「便所神」静岡県）

『イザナギ・イザナミの神様がいらっしゃり、たくさんの神様をおつくりになりました。その中で屎(くそ)から産まれた神様に「ハニヤスヒコの神(男神)」と「ハニヤスヒメの神(女神)」が産まれ、続いて尿の中から「ミヅハノメの神(女神)」が産まれたというお話です。

古事記では自然物が〝神〟であるという考えですから例え現代人が汚いと思うものでも古代人にとっては〝神〟の何物でもないわけです

「女神さま」はこの**「ハニヤスヒメの神」**と**「ミズハノメの神」**のことだと思います。

一方、仏教伝来と一緒にインドの「烏蒭沙摩明王(うすさまみょうおう)」という便所の神様も日本に入ってきていました。他の国でも日本人と似たような感性をもっているようです。いずれにしても大変古い大切な神様であることは間違いのないことです。

柿生郷土史料館

第２回　特別企画展　のご案内

テーマ　「佐藤英行画伯が描く　絵で語る故郷の　百年」

―― 旧柿生村・岡上村　１１か村を描いた大作 ――

期　日　４月／９日・１６日・２３日・３０日（土曜）
　　５月／８日・２２日・２９日（日曜）
　　６月／４日・１１日・１８日・２５日（土曜）

柿生・岡上の昔話し　No.3　「兄弟鳩」

昔、柿生の山のなかに兄弟の鳩が住んでいました。仲のよい鳩はどこへ行くのも一緒で食べ物も二羽で仲良く分けあって食べていました。

ある年の秋、二羽の鳩は木の実を探しながら楽しそうに飛び回っていました。その時、里の方から登ってきた一人の猟師が鳩を見つけ、ドーンと鉄砲で撃ったのでした。

それは兄の羽にあたり羽の半分がとばされました。弟は兄を抱えるようにしてやっとの思いで老木の穴にある巣にたどりつき兄を一生懸命看病しました。

弟鳩は毎日兄のエサを探して兄のもとにせっせと運びました。やがて寒い冬が来ました。雪が降り食べ物がなくなると畑の雪をかき分けて中の小虫などをとって自分は食べずに兄に食べさせました。兄は新しい羽が生えてきて少しずつ元気がでてきましたが、弟は痩せこけてしまいました。

冬のある日、兄はお腹が空いたので弟に早くエサをもって来いと無理をいうのです。弟は、仕方なく自分の空腹を押さえて雪のなかにエサをとりにでかけました。
そして、何時間もかかって雪の中から木の実を見つけだし、兄の待つ巣の手前に辿り着くところで力尽き死んでしまいました。兄は帰りの遅い弟に『きっと兄を捨ててどこかに逃げてしまった』と一人腹を立てていました。やがて雪がとけはじめる頃、雪の中に木の実をくわえたまま死んだ弟鳩を見つけました。兄鳩は弟のやさしい気持ちがはじめてわかり、いつまでもそばを離れませんでした。それからは、山で鳴く鳩の声は『おとうとおとうと』と鳴くのだそうです。

柿生郷土史料館開館のご案内

開館時間

開館：午前１０時
閉館：午後　３時

開館日

ガイドAP	4月　9日(土)	ガイドAP	5月　8日(日)
ガイドAP	4月１６日(土)	セミナーP	5月２２日(日)
セミナP	4月２３日(土)	ガイドAP	5月２９日(日)
ガイドAP	4月３０日(土)	カルチャーセミナーP	5/29 14時

(例) ※セミナAP→ガイドセミナーを午前と午後に実施　ガイドA→全体ガイドを午前に実施

６月以降の開館予定は「柿生文化」35号(3月18日発行予定)でお知らせ

◎展示物ガイドツアー　説明員による館内全体の展示物のガイドを行ないます
◉展示物ガイドセミナー　特定の展示物について講座形式で詳しく説明します
実施時間　A(午前)１１；００～１２：００　P(午後)１３：００～１４：００

◎カルチャーセミナー　２ヵ月に１回実施　郷土史に関するセミナーを行ないます

館内ガイドセミナー御案内

第２回
史料館　**館内ガイドセミナー**御案内
日　時　４月２３日(土)１４:００～
会　場　柿生郷土史料館
テーマ　「佐藤英行画伯の絵を見ながら語る吾が故郷(ふるさと)」(仮題)
内　容　佐藤英行画伯の郷土に関する作品をもとに、古き時代の柿生の姿をひもとく

カルチャーセミナー案内

第２８回
柿生　**カルチャーセミナー**ご案内
日　時　５月２９日（日）午後２時～
会　場　柿生中学校　柿生郷土史料館
テーマ　「多摩川流域 地名の謎」
講　師　鈴木　茂子　氏（日本地名研究所）
内　容　多摩川をはさんで東京と川崎で同一の地名があります。この謎を解きあかします。鶴見川文化研究のヒントにも…